

## < 書 評 >

### 山 脇 与 平 『社会と教育と技術論』

佐々木 亨

この書物は、技術教育にたずさわる者の立場から技術論つまり技術に関する理論的な諸問題を解明するとともに、技術論の観点から技術教育の教育内容編成の視点を論じたものである。

『技術論』あるいは『技術論入門』と題した書物は決してすくなくはない。その大部分は、技術とは何かという問題あるいはわが国の技術の存在構造やその特質を論じたものである。技術の歴史に関しても、最近はよい書物が出版されている。しかし調べてみると、数ある技術論に関する書物で技術教育の問題に言及したものは不思議な程少ない。全くなかったといっても過言ではない。こうした状況に照らして、技術論として解明すべき課題を真正面に据え、その技術論の観点から技術教育の諸問題を論じたこの書物は、たんに珍しいだけでなく、技術教育にたずさわる者には大いに歓迎されるべきものである。

本書の内容は次のように構成されている。

- 序 章 現代の技術論と技術教育
- 第1章 技術論とは
- 第2章 技能の定義と技術の性格
- 第3章 技能の発達法則性と技術教育
- 第4章 技術評論と技術教育
- 第5章 国民主権の技術教育と技術論
- 第6章 技術教育の体系化と技術論
- 第7章 技術論の観点からの技術教育体系化の基本的視点

著者は、一見世界の最先端を行くが如きわが国の技術水準が実際には大幅な技術導入に支えられていること、小学校ではまともな技術教育が課されず、中学校の技術科は生産技

術より「生活技術」に著しく傾斜していること、などの技術と技術教育をめぐるわが国の問題状況から説き起こしている（序章）。ついで、技術論と呼ばれる研究分野には、序章で概観したような技術評論のほか、技術の論理、技術の哲学を論ずる分野がある、と筆をすすめる。本書では後者に重点をおいた議論が展開されている。

第1章と第2章において、技術の概念規定にはいわゆる「意識的適用説」といわゆる「労働手段体系説」という二大潮流があること、意識（観念）のありようで結論が左右される前者では科学的議論が不可能で、後者の観点に立つことよってのみ生産過程の科学的分析が可能なこと、前者にふくまれる技能蔑視の思想は労働者蔑視につながること、いずれの観点に立つかは技術教育の教育内容をどう考えるかに大きな影響をもたらすこと、などがしめされる。これらの論点は社会科学にかなり立ち入っているが、語り口はやさしい。以上の議論を通して、技能が、狭義には「技術にかんする生産労働能力のうちの肉体的能力」をさすことが明らかにされる（第2章）。同時に著者は、国民本位、国民大衆のための技術教育を打ち立てるために、技能については、これまで慣用されてきたような技術にかんする肉体的能力に限定せず、技術にかんする精神的な労働力すなわち技術学的労働能力をふくめて広義に解すべきだと提唱している。

第3章では、技術には社会経済的（＝外的）性格と自然的純技術的（＝内的）性格とがあること、技術の発達の法則性はそれぞれ

の面の綿密な分析とそれらの統一的考察によって解明されること、などが具体例によって説明されている。著者が最も力をこめている章の一つであるように思われる。

第4章以下では、以上の考察を土台として、技術教育とくに技術科教育に焦点をしばりながら、教材（教育内容）とその体系化が検討されている。一言でいえば、「技術学と技能（狭義の肉体的技能）は技術教育の大切な両面であり、ちょうど車の両輪のようなものです」ということになろう（156ページ）。

著者は、技術教育の教材（教育内容）を農業をふくむ主要生産部門から選びとるという考えに賛意を表しながら、技術にそなわっているいわゆる個別的、特殊的性格、技術学と技能の統一理論と実際との統一などの困難な問題が多いことをもそっ直に指摘している。こうしたときに、技術教育の教材（教育内容）を物質・動力・制御・環境という観点からとらえることが重要になると強調している。いわゆる情報化の問題にも言及し、「制御を情報とおきかえることには、技術論の観点から……賛成できません」と述べている（180ページ）。

以上、盛り沢山の内容をかなり乱暴に要約して紹介したのだが、評者の理解では、従来の技術論研究の水準に照らしてみると、技術と技能との関係を深く、科学的に分析したところにこの書物の真骨頂があるように思われる。この点に成功している故に、この書物は技術教育研究にも重要な貢献をしているといつてよいであろう。

「技術者という慣用語」については、「精神的技能者あるいは精神技能者という慣用語をつくり出す必要がある」という記述（79ページ）には、著者のいおうとするところがわからないではないが、抵抗を禁じ得ない。また著者は学習を螺旋形式ですすめるべきことをしばしば強調しているが、（もちろんこの主張は正しいと思うのだが）本書の叙述自体には螺旋形式というより繰り返しというべき点が少なくない。それによって理解が助けられることが多いとはいえ、気にかかったことは否めない。こうした僅かな弱点をふくむとはいえ、全体としては重要な論点を解明した書物である。広く読まれることを期待したい。（B6版 222ページ 創風社刊、1986年、定価1500円）（名古屋大学）

## 技教研編 新版『製図』テキスト

- 監修 原正敏（千葉大教授） 村井敬二（前東大教授）
  - 練習帳形式でA4版 本文32ページ（付録）方眼紙、斜眼紙、製図用紙、計10枚
  - 定価 学校頒布価 430円 一部頒布価 500円（〒240円）
- お申し込みは 技教研事務局へ

技術教育研究会会報	〒160 東京都新宿区西新宿4-5-8 稲見ビル408号
通巻 189号	依田有弘方
1987年 4月10日発行	技術教育研究会（03-376-8875）
	振替 東京8-92005